

令和元年6月1日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04508

研究課題名（和文）学習における子どもの自己肯定化への介入としての授業 - 教室実践の活動理論的分析 -

研究課題名（英文）Transformative instruction as intervention in children's self-affirmation in learning at school: An activity-theoretical analysis of classroom practice

研究代表者

山住 勝広 (YAMAZUMI, Katsuhiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50243283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学習における子どもたちの自己肯定化に介入し、エージェンシー、すなわち行為の担い手となっていく能力と意志責任や動機づけを高める授業のあり方と手立てを明らかにしたものである。本研究では、公立小学校でのエスノグラフィックな調査研究によって得られたデータの活動理論的分析にもとづき、自己肯定化に介入しうる授業が、子どもたちの拡張的学習を通して現実化されることを解明した。子どもたちの拡張的学習は、自分たちの学習活動を自分たち自身で自主的・協働的に創造していくエージェンシーを拡張するものであり、それゆえに自己肯定化を促進・支援するものとなるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、子どもたちの学習への主体感や動機づけを高める自己肯定化に介入する授業をどのように創り出せるのかについて、子どもたち自身が行為の担い手となって活動を自主的・協働的に生み出していく能力や意志を高めていくような拡張的学習の考え方から解明したところにある。また、実際の学校現場での授業実践の詳細なデータの分析によって、自己肯定化に介入する授業のあり方を実証的に提起した点にも、本研究の学術的意義がある。したがって、本研究の社会的意義は、子どもたちが学業達成の格差や困難を自分たち自身で乗り越えていくことを支援する教育的介入の具体的な方策を明らかにし、提示したところにあるといえる。

研究成果の概要（英文）：This research study identified the forms of transformative instructional practices that encourage a sense of agency, responsibility, and motivation in student learning by intervening in students' self-affirmation. Based on an activity-theoretical analysis of data obtained from ethnographic research on pedagogical practices in a municipal elementary school, the study concluded that the transformative instructional practices in schools, which necessarily accompany the intervention in self-affirmation, are realized through expansive learning by children. Children's expansive learning develops their agency to independently and collaboratively create their own learning activities, and thus to promote and support their self-affirmation.

研究分野：教育方法学、学習・発達理論、文化・歴史的活動理論

キーワード：自己肯定化 授業実践 拡張的学習 エージェンシー 自主性 協働学習 活動理論 活動システム

1. 研究開始当初の背景

今日、学校教育の分野では、拡大する学業達成の格差の問題が深刻化しており、リテラシーとして測定される、子どもたちの学習成果そのものだけでなく、それをもたらす学習の背景要因がますます注目されるようになってきている(参照、Cohen & Sherman, 2014)。とりわけ、態度、帰属、信念など、子どもたちが学校・教室という社会環境と相互作用する体験や自身による状況解釈を通して構成していく、学習における「自己概念(self-concept)」の問題は、子どもたちの学習への動機づけや結びつき、それに起因する学業達成の研究領域において、新たな方向性となる中心テーマに躍り出てきているものである(参照、Pajares & Schunk, 2002)。

そうした背景のもと本研究は、学習の成果や学業達成に決定的な影響を与えている、子どもたち自身の主観的な事態把握や「自己概念」、「自己信念(self-belief)」に関する理論的かつ経験的な分析を進め、同時にそのような「自己」の解釈や理解に形成的に介入する教室実践に焦点化しようとする研究を推進しようとしたものである。

そのさい、学習環境をダイナミックな「活動システム(activity system)」としてデザインする「文化・歴史的活動理論(cultural-historical activity theory: 以下、活動理論という)」の枠組みを用い、学校における子どもたちの学習が単独の個人ではなく、対象、諸手段(ツールや記号)、コミュニティ、ルール、分業などの構造的な諸要因が連関する「活動システム」という高次のレベルで生成している点に注目することとした(参照、Engeström, 2015; Yamazumi, 2013; 2017; 山住, 2017a)。それによって、学習への子どもたちの「エージェンシー」、すなわち行為の主體的な担い手となっていく能力と意志を高める授業実践の諸特徴と、教師と子どもたちによるそうした協働的な「学ぶシステム」の創造について、学校での継続的な参与観察とエスノグラフィックな調査研究にもとづき明らかにしていくことが可能になると考えたのである。つまり、本研究は、「活動システム」に影響されるとともに、逆にその成果を決定的に左右し得る、子どもたち自身のパーソナルな教室体験と自己のあり方に焦点化していく新たな授業実践研究の発展をめざしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、学校における子どもたちの学習へのエージェンシーや動機づけを高め、学習成果としての学業達成を促進するために、(1) 子どもたち自身の教室での体験を授業の中で「自己肯定化(self-affirmation)」に向けて変化させていく介入をめぐる、理論的・方法論的な検討を精緻に行った上で、(2) 「主體的な自己の姿」の育成をめざした先進的な授業実践に関する継続的な参与観察とエスノグラフィックな調査研究を実施し、得られた詳細な経験的データの綿密な分析にもとづきながら、(3) 子どもたちの「自己肯定化」を支援する授業と学習の「活動システム」のあり方と具体的な方策について、活動理論の枠組みを用いて明らかにしようとするものである。

ここで「自己肯定化」は、教室実践が、成績、序列化、クラスメートとの競争など、子どもたちを評価状況にさらし、不安や緊張をもたらすことによって、自己概念を脅かす社会システムでありうることに對し、その脅かされた状況から自己をかばい、守り、肯定していくような「自己システム」を生成していくことを指している(参照、Cohen & Sherman, 2014)。

3. 研究の方法

本研究を、相互に密接かつ有機的に関連する次のような方法により進めていった。

(1) 学習における子どもの自己肯定化に関する理論的・概念的検討

自己の能力に対する不信、学校・教室への所属や他者からの承認をめぐる不安・緊張、自己実現や学習の価値・目的に対する疑念など、自己概念への脅威にさらされることを通して、子どもたちがいつしか学習への動機づけや結びつきを失い、学業達成が低下する危機に追いやられていくことについて、自己肯定化の理論にもとづく検討を進め、本研究全体の基盤となる理論的・概念的枠組みを構築していった。

そのさい、学校での子どもたちの学習成果を改善するための自己肯定化理論にもとづく介入の概念的枠組みと方法論に注目した(参照、Cohen & Sherman, 2014)。それは、拡大・深刻化する、子どもたちの学業達成の格差を乗り越えるために、学校教育の場において心理的な脅威にさらされている子どもたちが、「つまずき」やそれによって傷ついた自己イメージに自ら肯定的な意味を与え、困難をリフレーミング(ある枠組みをはずして、ちがう枠組みで見ること)し、出来事に新たな価値づけを行っていくことを支援するような介入の枠組みである。

(2) 自己肯定化への介入としての教室実践に関する活動理論的検討

(1)での理論的検討をふまえ、自己肯定化への介入を、教師と子どもたちによる日常の教室実践とどのように結びつけるのかについて、活動理論の概念的・方法論的枠組みにもとづき考察した。活動理論の観点からすれば、授業と学習は、教師と子どもたちが、学習の対象や学習が行われる活動システムに関する理解を自ら主體的に「拡張(expanding)」し転換するとき、発展的に促進され改善されることができると考えられる。ここでは、自己肯定化の理論を活動理論にもとづく介入の方法論と接合し、学習における子どもたちの自己肯定化への介入が、教室実践の活動システムを子どもたちが自ら主體的・能動的に転換していくことに対する支援であることを明確に

していく概念的・方法論的検討を進めた。

(3) 岐阜市立長良小学校における授業実践のデータ収集と分析

本研究では、自己肯定化理論と活動理論の両方から見て先進的で卓越した価値をもつ事例と判断できる、岐阜市立長良小学校の教育実践を取り上げ、継続的かつ綿密な参与観察とエスノグラフィックな調査研究を行い、詳細なデータ（授業と教育活動のビデオ録画・音声録音、写真、フィールドノート、子どもの表現作品、子どもと教師へのインタビュー、子どもへのアンケート調査、教師の会議のビデオ録画・音声録音、研究紀要・指導案・教育課程計画など）を収集していった。とくに、「いぶき」と名づけられた朝の会・帰りの会（毎日各20分で行われる長良小学校独自の学級活動）に注目し、そこでの「自分づくり」（＝「子どもが自己実現の喜びをもち、自己の価値を見つけていく、自主性を具現する手立ての一つ」）を子どもたちによる自己肯定化の活動ととらえた。同時に、そうした「いぶき」の時間における自己肯定化と、学級の仲間とともに問い続け「自らの高まりを自覚する『主体的な自己』の姿」を生成しようとする各教科の授業・学習活動との往還する関連性に焦点を合わせ、緻密な分析を進めていった。

4. 研究成果

(1) 自己肯定化への支援としての介入に関する研究成果

自己肯定化を支援することによって、子どもたちの学習成果を改善していく介入においては、子どもたちの内面に価値の肯定化や転換を生じさせるような作業を促すところに介入の焦点が合わされている。これは、フォードル・ヴァシリュークの「体験過程(переживание)」概念と結びつけてとらえるならば、苦難や危機に直面した個人がその内面に「精神の均衡、意味づけ、落ち着き、新たな価値観など」(Василук, 1984, p. 13)を生み出していくことによって、苦難や危機を乗り越え生きていくようなプロセスを支援する介入といえるだろう。つまり、自己肯定化の支援という介入方法は、ヴァシリュークが主体による新しい意味の創造としてとらえた「体験過程」という内面的・主観的な活動を促進しようとするものと見ることができるのである。

こうした主体の自己肯定化や体験過程への介入は、人間発達研究における独自の実験方法としてレフ・ヴィゴツキーが提起した「二重刺激法(методика двойной стимуляции)」に見出される介入の方法論的原理を共通基盤とするものと考えることができる。その方法論的原理とは、ヴィゴツキーの発達理論における中心テーマ、すなわち高次精神機能の発達における主体のエージェンシーの生成という問題と緊密に結びついたものである(参照、山住, 2017a, pp. 52-55)。

「二重刺激法」とは、目の前に自身の知識・技能を上回るような課題が置かれ、いわば問題状況に直面した人間が、同時に「第二の刺激群」として、問題を解決するためのツールや記号を与えられる、という実験方法である(Выготский, 1930/1984, p. 78; 「二重刺激法」という命名はここからきている)。こうした方法において、人は、第二の補助刺激の助けを借りながら問題状況を自ら変化させ、問題解決に向かう自らの行動を自ら組織化していくのである。

ヴィゴツキーが二重刺激法を提起するとき、彼は、主体のエージェンシーが、決して個人の内部から自然に生じてくるのではなく、何がしかのツールに媒介され助けられることによって創り出されることを強調しているといえよう。つまり、ここでヴィゴツキーは、新しい刺激の導入を通じた状況への人間の積極的介入に着目し、そこに人間の自由な行為の発達を見出そうとするのである。その自由とは、人が自分の反応を決定する刺激を自ら創造し、そのいわば人為的に創り出された手段刺激の助けを借りて、自分自身の行動過程を支配し、自分の行動を自分で決定する点にある。このように、ヴィゴツキーは、与えられた刺激に対して新しい刺激を自ら構築するという刺激の重層化によって、状況への積極的介入を自ら行っていくところに、主体のエージェンシーの生成と発達が見出されることを、ここで提起しているのである。ヴィゴツキーの二重刺激法に関する従来の検討では、この点への注目がなされてこなかったことを、ユーリア・エンゲストロームは次のように厳しく批判している。

二重刺激法は、しばしば、たんに特定の学習課題や問題解決における遂行行動を高める手段としてのみ解釈されている。そうした技術的な解釈は、二重刺激法がエージェンシーや意志を構築するメカニズムとして本質的にもっている重大な発達上の意義を無視している。(Engeström, 2009, p. 313)

主体の自己肯定化や体験過程への介入は、ここでエンゲストロームが指摘するような、ヴィゴツキーの二重刺激法がもつ「重大な発達上の意義」と結びつけて再解釈することができる。つまり、主体による新しい意味の創造や構築という内面的・主観的な活動への支援としての介入は、ほかならない主体自身が新たな第二の手段刺激を用いて自ら状況へ積極的に介入するようなエージェンシーや意志の生成メカニズムを促そうとするものなのである。

(2) 岐阜市立長良小学校における子どもたちの自己肯定化への介入としての教育に関する活動理論的分析

岐阜市立長良小学校は、日本の生活教育運動を代表する教育実践家であった野村芳兵衛(1896-1986)が戦後初期の1946(昭和21)年から1953(昭和28)年に校長を務め、教師たちとともに、生活教育を基盤にした教育課程である「長良プラン」を創造・実践し、今日まで一貫して「子どもの側に立つ教育」の理念のもと、子どもの自主性と連帯性を育む教育を創造・

継承してきた公立の学校である(参照、山住, 2017b)。

長良小学校は、野村の教育構想と提案を源流にして、仲間づくりを基盤にした自主的学習の活動システムを、教師と子どもたちが協働で創り上げていくような教育実践を生み出している、ととらえることができる。そうした教育実践では、協働で学習の活動システムを創造する「責任」と「権限」が子どもたちに委ねられ、譲り渡され、子どもたちの自主性に任せるということが基軸になる。そこでは、子どもたちが自ら学習活動のエージェントであること、つまり協働の担い手になっていくというあり方が高められ、互いの応答性や連帯感が強められていく。そのような教育実践の中で子どもたちは、自分たちの学習活動を創造する「権限(authority)」を獲得することによって、その学習活動のまさに「制作者(author)」となることができるのである(参照、Engeström, 2009, p. 317)。

長良小学校のこうした教育の中で、子どもたちは、エンゲストロームが独自の学習理論として提起している「拡張的学習(expansive learning)」(Engeström, 1987/2015, 2016; 山住, 2017a)と見ることのできる学習へと接近している。「拡張的学習」とは、いまだここにはない新しい活動システムを創り出す人々のエージェンシーを拡張していく学習である。つまり、長良小学校では、学習の新しい活動システムを自主的に構築し、自分たち自身で創り出していくことを通して、活動の担い手としてのエージェンシーを拡張していく拡張的学習が、教師と子どもたちの協働によって生み出されている、ととらえることができるのである。

長良小学校のきわめて注目に値する教育実践のうち、とくに、「いぶき」と名づけられた朝の会・帰りの会における「自分づくり」、つまり「自主性」を育むことをねらいにした、「子どもが自己実現の喜びをもち、自己の価値を見つけていく活動」(岐阜市立長良小学校, 2017, p. 35)は、子どもたち自身による自己肯定化への自主的で協働的な介入の活動ととらえることができる。そうした「いぶき」の時間における自己肯定化と、学級の仲間とともに問い続け「自らの高まりを自覚する『主体的な自己』の姿」を生成しようとする各教科の授業・学習活動とは、相互に関連し、往還する関係でつながることによって、「意志あるめあて」をもったひとりひとりの学校・学級生活の「生き方のサイクル」を創り出している。

一日の始まりである「朝のいぶき」は、「学級独自の活動」→「めあてづくりのペア交流」→「めあてづくりの全体交流」→「教師の話」といった内容で進められる。一日の学習と生活は、「帰りのいぶき」の時間に、子どもたち自らによってふり返られ、ペア交流や全体交流を通して相互に価値づけられることになる。一日の締めくくりである「帰りのいぶき」は、「仲間のよいことみつけ」→「めあてをふり返るペア交流」→「めあてをふり返る全体交流」→「教師の話」→「学級独自の活動」といった内容で進行する。

「いぶき」は、子どもたちが一日一日を目的的に生きていく中で、「自己実現」を図る力を育み、仲間とともに相互に認め合い、「他者受容」を行いながら、「自己実現」の喜びを味わうことで、自己と他者の「価値」を同時に発見していく活動である(岐阜市立長良小学校, 2017, pp. 36-37)。そこでは、「支持的な風土の漂う学級」(p. 37)が基盤となって、仲間との「価値」の相互的な肯定化を通じた自己肯定化が促進されることになる。その意味で、長良小学校のきわめて独創的な朝の会・帰りの会である「朝のいぶき」・「帰りのいぶき」は、子どもたちの自己肯定化への優れた介入の実践と見ることができる。しかも、「朝のいぶき」・「帰りのいぶき」は、それだけが独立して行われる時間ではなく、各教科の学習と日々の学校生活を「意志あるめあて」をもった「生き方のサイクル」の中に包み込み、統合させる働きをもっている。子どもたちは、「朝のいぶき」・「帰りのいぶき」を、活動システムの「道具」、ヴィゴツキーの用語でいえば「第二の補助刺激」にして、それに媒介されるかたちで、日々の学習や生活の経験を、自己肯定化や自己概念の発達、あるいは他者理解と自己理解に関連させ、結びつける機会をもつことができるのである。

長良小学校における授業実践は、「いぶき」とセットになり、そこで「めあてづくり」が行われることによって、学習活動のシステムを自主的に連帯してデザインしていく子どもたちの姿が現れるものとなっている。こうした授業の自主的な協働デザイン、すなわち子どもたちによる「協働的な自己組織化(collaborative self-organization)」が可能なのは、授業における学習に対する主体性と責任と権限を、教師と子どもたちが互いに分かちもち、共有し、任せ合っているからだと考えられる。

本研究における長良小学校の教育実践を事例とした活動理論的分析は、その成果を結論としてまとめるならば、次のような3点を明らかにするものとなった。

第一に、授業実践と学習活動のシステムに、子どもたちの自己肯定化への介入を組み込んでいくことは、自己概念を脅かす社会システムであるような教室実践から自己をかばい、守り、肯定していくような自己システムの生成を可能にする。

第二は、長良小学校の「いぶき」における子どもたちの自己肯定化への介入の実践は、授業と学習の活動システムに組み込まれた、子どもたちの自己肯定化に介入するための「道具」ととらえることができる。こうした「道具」に媒介された授業実践と学習活動のシステムは、学習の「対象」を拡張的に変革させることに成功している。つまり、そこでの活動システムの「対象」は、伝統的な学校教育に支配的な「成績」「序列化」「競争」など、子どもたちに対する評定・評点から、「自己実現」の喜びをもち、それゆえに「自己の価値」を見つけていくような自己肯定化へと、移り変わっている。

第三に、教師と子どもたちが協働する活動システムの「対象」の変革と、それによって生じ

る活動システムの新たな創造は、活動の「主体」による「拡張的学習」を通してなされることになる。学校における子どもたちの「拡張的学習」は、ひとりひとりの子どもが教師や仲間と協働して学習の活動システムを自主的に創造してくような学習である。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクトおよび今後の展望

学校教育の分野における学業達成に関する研究の狭小な認知主義的枠組みの限界を拡張し、教室における学習に決定的な影響を与えている、子どもたちの情動的な体験や自己肯定化の過程に焦点化して、そうした過程に対する子どもたち自身による自主的で協働的な介入の活動を明らかにした点に、本研究のインパクトがある。

本研究は、理論的な枠組みの精緻な構築と詳細で具体的な実証的研究とを兼ね備えており、国内外にアピールできる成果が得られたものといえる。また、今後の展望として、人文・社会科学の広範囲の分野に影響を及ぼしうる、参加的な介入(participatory intervention)の研究手法論の創造へと本研究を発展させていくことも可能である。

<引用・参考文献>

- ① Cohen, G. L., & Sherman, D. K. (2014). The psychology of change: Self-affirmation and social psychological intervention. *Annual Review of Psychology*, 65, 333-371.
- ② Engeström, Y. (1987/2015). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research* (2nd Edition). New York: Cambridge University Press. = (近刊). 山住勝広訳『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社.
- ③ Engeström, Y. (2009). The future of activity theory: A rough draft. In A. Sannino, H. Daniels, & K. D. Gutiérrez (Eds.), *Learning and expanding with activity theory* (pp. 303-328). Cambridge: Cambridge University Press.
- ④ Engeström, Y. (2016). *Studies in expansive learning: Learning what is not yet there*. New York: Cambridge University Press. = (2018). 山住勝広監訳『拡張的学習の挑戦と可能性—いまだここにはないものを学ぶ』新曜社.
- ⑤ 岐阜市立長良小学校 (2017). 『『たくましさ』を培う教育の創造』山住勝広編『子どもの側に立つ学校—生活教育に根ざした主体的・対話的で深い学びの実現』(pp. 21-45). 北大路書房.
- ⑥ Pajares, F., & Schunk, D. H. (2002). Self and self-belief in psychology and education: A historical perspective. In J. Aronson (Ed.), *Improving academic achievement: Impact of psychological factors on education* (pp. 3-21). Amsterdam: Academic Press.
- ⑦ Василюк, Ф. Е. (1984). *Психология переживания. Анализ преодоления критических ситуаций*. Москва: Издательство Московского университета.
- ⑧ Выготский, Л. С. (1930/1984). Орудие и знак в развитии ребенка. В кн. Л. С. Выготский, *Собрание сочинений, Том 6* (С. 5-90). Москва: Педагогика. = (2006). 柳町裕子・高柳聡子訳『記号としての文化—発達心理学と芸術心理学』水声社.
- ⑨ Yamazumi, K. (2013). Beyond traditional school learning: Fostering agency and collective creativity in hybrid educational activities. In A. Sannino, & V. Ellis (Eds.), *Learning and collective creativity: Activity-theoretical and sociocultural studies* (pp. 61-76). New York: Routledge.
- ⑩ 山住勝広 (2017a). 『拡張する学校—協働学習の活動理論』東京大学出版会.
- ⑪ 山住勝広編 (2017b). 『子どもの側に立つ学校—生活教育に根ざした主体的・対話的で深い学びの実現』北大路書房.
- ⑫ Yamazumi, K. (2017). Engaging children in reading activity through collaboration in a Japanese elementary school: An activity-theoretical case study. In C. Ng, & B. Bartlett (Eds.), *Improving reading and reading engagement in the 21st century: International research and innovation* (pp. 205-229). Singapore: Springer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 山住 勝広、子どもたちの自己肯定化への介入としての教育—学校体験の活動理論的分析、活動理論研究、査読無、第4号、2019、pp. 1-15
- ② 山住 勝広、学校における子どもたちの拡張的学習の生成—学習活動を創り出すエージェンシーの発達に向けて、活動理論研究、査読無、第4号、2019、pp.17-27

〔学会発表〕(計14件)

- ① 山住 勝広、協働する防災学習—未来のまちづくりのためのエージェンシーの生成、日本発達心理学会第30回大会、2019
- ② 山住 勝広、子どもと地域住民が協働で創る防災学習の活動理論的介入研究、活動理論学会春季研究発表会、2019
- ③ 山住 勝広、変化を創造する教師のエージェンシーに関する活動理論的介入研究の構想、活動理論研究会、2018
- ④ 山住 勝広、権威的な道德教育か、それとも民主的な道德教育か?—小学校の道德授業研究における教師の拡張的学習への活動理論的介入、活動理論学会秋季研究発表会、2018

- ⑤ YAMAZUMI, Katsuhiko, Authoritative or democratic moral education?: Research on a formative intervention to promote teachers' expansive learning, The 2018 International Conference of the Asia Pacific Educational Research Association (APERA) and the Educational Research Association of Singapore (ERAS), 2018
- ⑥ 山住 勝広, ユーリア・エンゲストロームの拡張的学習理論—その可能性とこれからの挑戦、日本発達心理学会第29回大会、2018
- ⑦ 山住 勝広, 子どもの側に立つ「拡張する学校×共創する学び」への招待～いまだここにはないものを求めて～、昭和女子大学第4回現代教育研究所フォーラム、2018
- ⑧ 山住 勝広, エリ・エス・ヴィゴツキーの二重刺激法における人間発達研究の方法論—行為の主体性(agency)と自由意志の生成原理に向けて、日本発達心理学会第28回大会、2017
- ⑨ 山住 勝広, エリ・エス・ヴィゴツキーの学習・発達理論における授業と対話の問題、レフ・ヴィゴツキー生誕120年記念研究フォーラム、2016
- ⑩ YAMAZUMI, Katsuhiko, Engaging children in inquiry-based learning through collaboration in a Japanese elementary school: An Activity-theoretical study, The 2016 International Conference of the Asia Pacific Educational Research Association (APERA) and the Taiwan Education Research Association (TERA), 2016
- ⑪ YAMAZUMI, Katsuhiko, Transformative instructional practices for enhancing children's self-affirmation in a Japanese elementary school: An activity-theoretical case study, The 31st International Congress of Psychology (ICP2016), 2016
- ⑫ 山住 勝広, 学習における子どもの自己肯定化を促す授業づくりと実践—活動理論にもとづく事例の分析、第5回活動理論学会研究大会、2016
- ⑬ 山住 勝広, 教育実践研究への活動理論的アプローチの可能性、日本体育科教育学会第21回大会、2016
- ⑭ 山住 勝広, 子どもたちの自己肯定化への介入としての授業—教室体験の活動理論的分析、日本発達心理学会第27回大会、2016

[図書] (計2件)

- ① 山住 勝広 (編) 他、北大路書房、子どもの側に立つ学校—生活教育に根ざした主体的・対話的で深い学びの実現、2017、pp. iii-vi, 1-20, 83-109, 191-196
- ② YAMAZUMI, Katsuhiko, 他、Springer, Improving reading and reading engagement in the 21st century: International research and innovations, 2017, pp. 205-229

[その他]

ホームページ等

<https://wps.itc.kansai-u.ac.jp/kyamazum/>

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。